

発行所
 札幌市北区北15条西7丁目
 北大医学部同窓会
 TEL&FAX (011) 706-5007
 E-mail: furate@med.hokudai.ac.jp
 http://www.med.hokudai.ac.jp/~alum-w/
編集人 田中 伸哉
発行人 浅香 正博

北大医学部同窓会新聞



CONTENTS

- (1) 北海道大学理事・副学長就任のご挨拶
.....安田 和則

- (2) 北海道大学保健センター長就任のご挨拶
.....橋野 聡
 ・名誉教授安田慶秀先生(42期)を偲んで
松居 喜郎
 ・フラテ祭2013開催報告

- (3) 新世紀の医学に向けて (23) 大滝 純司
 ・エルムの仲間達へ③.....矢倉 英隆

- (4) 北大医学部創設100周年に向けて
 (5) 思い出の医学部基礎校舎・附属病院

- (6) 「海外で活躍する同窓生」...庄野 雄介

- (7) 告知板
 ・フラテ100号発行のお知らせ

- (8) 平成25年度
 フラテ研究奨励賞受賞候補者の募集!!
 ・新刊書紹介 ・ご逝去者
 ・お詫びと訂正 ・一面の写真説明
 ・編集後記

「モデルバーン」

吉田 美穂(83期)



北海道大学理事・副学長就任のご挨拶

安田 和則(52期)

本年4月1日より北海道大学理事・副学長(企画・経営担当)に就任しております。待たなしの国立大学改革が迫られているこの嵐の中で、この職務を務めることの重大さを痛感いたしております。医学研究科出身の理事・副学長は井上芳郎先生以来であり、その分、私の責任はさらに重いものと認識しております。全力で職務に専念し、微力ながらも北海道大学の発展のために尽くす覚悟です。そして、もし可能であればこの経験を本邦の医学教育および大学病院の発展に活かすことができると考えております。今後ともご指導、ご鞭撻の程、宜しくお願い申し上げます。

アカデミアの本質は、大学人が自らの良心と責任に基づいて自由に行う知の創造とその伝承・普及です。その一方で、国税によって運営される国立大学は、我国の将来の発展に資する研究・教育に重要な役割を果たすことを国民から負託されています。研究に重点を置く総合大学としての我が

北海道大学は、この二つの本質を同時に実現するために、「時流に流されない普遍的な知」の探求と「時を得た爆発的な知」の創造を、様々な学問領域においてバランス良く押し進めることが必要です。然るに今、北海道大学ではそのバランスに問題が生じています。北海道大学における近年の教育および研究は間違いなく進歩しています。しかし世界の多くの大学の進歩はそれを上回るものがあり、国際的に見た時、北大の地盤は相対的に沈下しているといわざるを得ない状況があります。残念ながら、この状況はそのまま医学研究科にも当てはまります。我々はこの事実を直視しなければなりません。

今、国立大学に向けられる社会の目は大変厳しいものがあり、大きな大学改革が求められています。改革のポイントとしては、人材・システムのグローバル化による世界トップレベルの研究拠点形成、教育研究組織再編によるイノベーション創生機能の強化、

そして国際的に通用するグローバル人材を育成できる教育の強化が挙げられます。今、われわれに求められている改革は、他人や国から押し付けられたものと考えべきではありません。現在のこの状況は、北大が10年後に世界で輝きを放つ大学であるために、自ら行動を起こす好機と考えるべきです。私は全学的視野を持って、北大改革の舵を取って行きたいと思っております。そして、これまで優れた研究・教育を行ってきた医学研究科には、北大改革の旗手となる部局の一つとなっていただけることを期待しております。

最後に、個人的な近況報告をさせていただきます。就任後、あっという間に5か月が過ぎました。理事職は、4年前に経験した医学研究科長職よりもはるかに多忙であり、朝からの全ての時間を北大正門にある大学本部で執務しております。そのため、私に用があるスポーツ医学分野教室員には、はるばる本部まで来てもらわね

ばなりません。医学研究科へは夕方から夜にかけて出勤し、ある種の業界風に「おはよう」と教室員に声をかけております。医学研究科で研究させていただく権利と義務に関しては、理事の職務に医学研究への従事を「付加」してもらうことによって確保させていただいております。結構、きついと感じるときもありますが、研究は私の趣味であり、文科省科研費および運営費交付金特別研究の代表研究者としての責任を交代できる状況になるまで今しばらく頑張りたいと思っております。

10年後、北海道大学は世界でどのような存在になっているのでしょうか？我が北海道大学は様々な世界の課題・難題の解決に貢献する大学として世界から高く評価され、敬意が払われる大学になっていなければなりません。137年間にわたって培われてきた北大の伝統。私はこの伝統を守るために、私の北大における最後の時間を捧げる覚悟です。

北海道大学保健センター長就任のご挨拶



橋野 聡 (58期)

武蔵 学名教授の後任として、2013年4月より北海道大学保健センター長に就任させて頂きました北海道大学58期の橋野 聡でございます。これまでの31年間は、北海道大学第三内科・消化器内科・血液内科で血液疾患(白血病、悪性リンパ腫、多発性骨髄腫など)に対する造血幹細胞移植の研究・診療・教育を進めてまいりました。4月からは180度の方向転換をし

て、18,000人の北海道大学の大学生・大学院生・研究生・留学生の学校医として、また、4,000人の北海道大学教職員の産業医として、たいへん責任の重い業務を拝命させて頂きました。膨大な業務内容にまだ多少の戸惑いもございますが、遅滞なくそして正確な業務の遂行を心がけてまいります。

保健センターは、内科医師3名(教授1名、助教2名)、精神科医師2名(准教授1名、助教1名)、歯科医師1名(助教1名)、看護師3名、カウンセラー5名(講師2名、臨床心理士3名)、薬剤師1名、臨床検査技師1名、事務4名の小所帯ではございますが、北海道大学・大学院医学研究科・北海道

大学病院からのご理解と厚いご支援・ご協力を頂き、一つの地方自治体にも匹敵する、22,000人に及ぶ学生と教職員の健康管理を担っております。

今後の保健センター未来構想を思い描くにあたりまして、その存在意義と存在価値を明確に打ち出す必要がございます。学生や教職員の皆様に健康を維持して頂くためには、保健センターに送られてくる健診結果や受診者を待ってそこから対応するのでは間に合いません。学生や教職員への講演・ホームページからの積極的な発信・一般向けセミナー開催などで、健康に関する最新の情報をこまめに提供し続ける必要がございます。そのために

は、保健センターの教職員が個々のスキルを絶えず向上させる姿勢と努力が欠かせません。また、学問として健康管理医学を極めることも重要と考えております。積極的に予防医学の臨床研究を推し進め、競争的資金を獲得出来るようにしたいと思っております。

同窓会の皆様のご子息やお孫さんも、多数北海道大学におられると思います。どうか今後も北海道大学生や教職員のために、保健センターへ多くの忌憚ないご意見やご要望をお寄せ下さい。心身共に強靱な若手研究者が北海道大学から世界に大きく羽ばたくために、少しでもお役に立たせて頂きたいと思っております。



名誉教授 安田慶秀先生(42期)を偲んで

北海道大学大学院医学研究科循環器・呼吸器外科学分野

松居 喜郎(56期)

北海道大学大学院医学研究科循環器・呼吸器外科学分野の前身、循環器外科教室の初代教授、北海道大学名誉教授安田慶秀先生が7月9日急逝されました。同窓会の皆様に謹んでご報告申し上げます。

故人は昭和16年5月8日沖縄県読谷村で誕生されました。昭和35年沖縄の本土復帰前の自費留学制度に応募され、はるばる北海道大学医学進学課程に進学されました。昭

和41年卒業、東北大学医学部で研修を始められ、翌年北海道大学第二外科に入局されました。昭和54年手術部助手、昭和59年第二外科講師、昭和61年救急部助教授となられ、平成1年には文部省在外研究員として米国Baylor Collegeに留学されています。翌平成2年11月に北海道大学循環器外科初代教授となられ、その後平成17年に退官され北海道大学名誉教授となられました。

その間、心臓血管外科領域で大きな足跡を残され、特に大血管領域での拡大手術の標準化には大きな業績を残されました。学会活動も積極的にされ、特に日本血管外科学会では理事長として働かれ、学会主催も、平成11年には第41回国際脈管学会、平成15年第33回日本心臓血管外科学会、平成16年に第45回日本脈管学会を主催されています。退官後は、平成17年からNTT札幌病院血管センター長、平成19年からは5年間現北海道中央労災病院せき損センター院長として活躍されました。

平成22年9月に膀胱がんの診断を受けられ11月手術。経過も順調でしたが、残念ながら1年後に再発されました。しかし当時は

比較のお元気で、平成25年2月には、お世話になった医局員があつまり「安田慶秀先生を囲む会」を北大構内のエンレイ荘で行いたくさんの仲間が集まりました。残念ながら、がんは進行し、6月再入院、最期はご自宅でご家族と穏やかな時間を過ごされた後、昨7月9日11時5分、その72歳の生涯を終えられました。

72歳と現代では短い生涯を終えられた先生ですが、われわれ弟子たちを育てていただき、たくさんの立派なご子孫を残され、理想的な生涯を完遂されたものと思います。故郷の沖縄と北海道をこよなく愛し、偉大な足跡を残された安田慶秀先生のご冥福をお祈りいたします。

フラテ祭2013開催報告

フラテ祭実行委員会事務局

去る9月28日(土)、本年度で第七回目となる「フラテ祭2013」は北海道大学ホームカミングデーと同日に開催いたしました。同窓生、教員、学生父母、関連企業、医療関係者の方々など延べ約100名が参加されました。

開催会場は2010年7月に完成した医学部学生会館「フラテ」(以降、フラテ会館)のホールと大研修室で、例年同様、多くの参加者にお越しいただきました。

第一部では、施設・キャンパスツアーを行いました。ツアーコースは「医学部施設巡

り」、「キャンパス巡り」の2つ設け、多くの方々にご参加いただきました。

第二部の講演会では笠原正典医学部長が「北海道大学医学部・大学院医学研究科の目指すものー現況と展望ー」、寶金清博北海道大学病院長が「Big Pictureの中の北大病院ー世界、日本、北大、北大病院ー」、浅香正博北海道大学医学研究科がん予防内科学講座特任教授(医学部同窓会会長)が「わが国から胃がんで亡くなる人をなくすための具体的戦略」と題して講演されました。

その後、第9回目となる音羽博次奨学基金授与式が行われ、11名の学生に奨学基金が授与され、華やかなうちに式典が終了しました。

第三部のフラテ交歓会は、ホールにて、吉岡充弘フラテ祭実行委員会長の開会挨拶、北大男声合唱団による「都ぞ弥生」・「学友会歌」の合唱が披露されました。その後、場所を移して大研修室では、浅香正博特任教授(同窓会会長)の祝杯により開宴し、祝宴では学生による弦楽四重奏に耳を傾けながら和やかな雰囲気で行われました。

また、現役学生による学生生活の紹介があり、父母の方々をはじめ、多くの方が興味深くご覧になっていました。そして、同窓生と北大男声合唱団が一体となり「都ぞ弥生」を合唱しました。最後には寶金清博北海道大学病院長による乾杯にて締め括られました。

多くの方のご支援とご協力をいただき今年も無事にフラテ祭を終えることができました。この場を借りて御礼申し上げます。



第1部 施設・キャンパスツアー



第2部 講演会～笠原正典医学部長



第2部 講演会～寶金清博北海道大学病院長



第2部 特別講演～浅香正博先生



音羽博次奨学基金授与式



第3部 男声合唱団による都ぞ弥生



第3部 学生による弦楽四重奏



第3部 医学部学生による学生生活等の紹介

新世紀の医学に向けて (23)

「医学教育の国際化」

医学教育推進センター
教授

大滝 純司(会員2)



本学医学科では、カリキュラムの改変が進行中です。これは本学に限ったことではなく、日本全国、そして世界中で同様の動向が見られています。この原因の一つになっているのが、医学教育の国際化です。本稿では、その経緯と現状についてご紹介いたします。

現在の医学教育には様々な課題が指摘されています。中でも迅速な対応を迫られているのが、医学教育の国際的な標準化です。EUや中国、そして北米が先導する形で、医師の能力や医学教育のシステムの質を担保しようという圧力が増えています。国際標準に対応している国の医師資格だけが国際資格となり、その他は地域限定資格と見做される可能性さえ生じています。

EUヨーロッパ連合では、大学や大学院の学位の基準とその教育カリキュラムを共通化し、EU内部での単位互換を目指しています。1999年にイタリアのポローニャに各国の代表者が集まりこの合意を宣言(ポローニャ宣言)したことから、この合意に向けての検討作業はポローニャ・プロセスと呼ばれています。その目的は、学生の移動性を高め、大学間の競争を促進させることにあり、医学教育も含まれていま

す。EUの中でも英国は、優れた医学教育で知られていますが、以前から慢性的な医師不足の問題を抱えており、海外、特にEUから入ってくる医師の能力を確保することに熱心です。海外の医学部卒業生を積極的に受け入れる一方で、その能力を担保するために、世界各国の医学部を組織的に視察してきました。因みに日本を視察した結果では、日本の初期臨床研修修了時点と英国の医学部(その多くは高卒者が入学する5年間の教育課程)卒業時がほぼ同等の能力であると評価されたそうです。

中国は、既に1990年代から医学教育の国際標準化に関与してきました。その最大の理由は、自国の医学教育のレベルアップにあると推測されます。同国はInstitute for International Medical Education (IIME)という医学教育に関する国際機関を支援し、そのIIMEが作成した医学教育の国際基準の指針に沿って、自国のトップクラスの医学部8校の医学教育を改革し、その経過や成果を報告しています。同国の医学教育制度は多様であり、標準化が課題と指摘されていますが、トップクラスの大学の医学教育のレベルを国際基準まで引き上げること、全体のレベルアップも目指している

と思われます。

そして現在、最も注目されているのが、北米から発信された医学教育の国際標準化の動きです。これは、医学教育関係者の間では「2023年問題」と呼ばれています。北米には、他の国や地域の医学部を卒業した者を対象として米国医師国家試験の受験資格を審査する機関(ECFMG)があります。このECFMGが、受験者を、2023年以降は国際的な認証を受けた医学部の出身者のみに限定すると、世界各国に通告したのです。つまり、受験希望者の能力を審査する前に、卒業した学校によって、いわゆる「足切り」をするというのです。

米国は数多くの医学部卒業生を世界中からレジデントとして受け入れています。これについては、途上国からの頭脳流出につながるため、以前から根強い批判があります。今回の新たな制度の導入についても、医学教育の国際学会などで、途上国側からの批判も含めて活発に議論されています。この制度の最大の目的は、カリブ海諸国に乱立しているという医学部の教育レベルの引き上げにあるとされていますが、制度の及ぶ範囲に日本も含まれています。

文部科学省や全国医学部長病院長会議をはじめとする医学教育関係の組織は、この問題への対応を開始しています。日本国内の医学部の国際認証を担う公的な団体として日本医学教育認証評価評議会(JACME)を設置すると共に、この春には「医学教育分野別評価基準日本版」の案が公開され、各方面で議論や検討が始まっています。国際比較では、日本の医学教育は臨床実習などが不十分という指摘があり、対応を国全体で整えることが特に重要であると指摘されています。

本学医学科でも、この課題について検討を重ねた結果、今年度の入学生から医学科のカリキュラムを改定しました。特に臨床実習を大幅に拡充し、見学型から診療参加型への移行を推し進めます。この診療参加型臨床実習では、大学病院だけでなく、学外の多くの医療機関等で医学生が長期間にわたり実習することを想定しています。

医師や患者が国境を越えて行き交う時代になっています。そして医学教育制度も国境を越えて比較される状況が生じています。日本の医学教育の特徴や利点を生かしつつ、医学教育の国際化に対応することが求められているのです。

エルムの仲間達へ③ 「科学と哲学のインターフェースから世界を観る」



矢倉 英隆
(48期)

わたしは1972年(昭和47年)に医学部を卒業。1年間産婦人科学講座にお世話になった後、第一病理学講座の大学院生になった。ヒト組織適合抗原(HLA)についての研究を行い、大学院4年(1976年)の時に米国に向かった。ボストンに出来たばかりのSidney Farber(現Dana Farber)がん研究所でおそらく初めての日本人として2年間、それからマンハッタンにあるSloan-Kettering記念がん研究所に移り5年の時を過ごした。1983年夏に帰国。旭川医科大学第二病理学講座で5年半、1989年(平成元年)から2007年春の退職まで東京都医学研究機構・東京都神経科学総合研究所(現東京都医学総合研究所)で免疫学の研究に携わった。

退職の2年前。それまでは終わりが無いと思っていた仕事が自分の意思とは関係なく物理的に遮断されることを知った時、同じことが自分の生についても起こることに初めて気付くことになり、この世界から消える前に何をどのようにやって生きるべきなのかという哲学的問いが生まれて初めて迫ってきた。現役時代には追われるように生活していたため、自分の中に芽生えた疑問をいつも先送りして

きたためだと思うが、持てる時間のすべてを使ってこの世界について考えてみたいという願望が生まれていた。このことと絡むのがフランス文化であった。その数年前から齧り始めたフランス語を通して触れるフランス文化に根付く思考様式が、それまで浸りきっていたアングロ・サクソンの功利主義的な考え方と明らかに異なっていること、そしてそこに思考の自由な広がりがあることに新鮮な驚きをもって気付いたのである。この二つが自然に繋がり、しばらくの間フランスで自らの興味の赴くままに考える時間を取りたいという気持ちに固まっていた。幸いにもパリ第1大学パンテオン・ソルボンヌの科学哲学の教授が修士の学生として受け入れてくれたため、退職した2007年の秋からパリに移住。2年間の修士課程を終え、現在はパリ大学ディドロの博士課程に在籍している。

科学を離れ、フランスで自らを省みながら哲学する中で、科学の領域だけではなく日本人の思考空間が以前よりよく見えるようになった。例えば、医学や科学の専門の中にいる時、しばしばそれがその人にとっての全世界になってしまい、しかもそのことに気付かないことが多い。実はこの状態こそが医療を含めた人間社会の多くの問題の根にあることではないかと考えるようになった。科学は人間の営みのほんの一部にしか過ぎないという認識とそれ故に重要になる科学の周辺領域

(例えば、哲学や歴史など)との接触の意味に目を開かされたのである。また、フランスの教育を受ける中でフランス人に求められる頭の使い方がわれわれのものとは大きく異なることにも気付くことになった。それは、答えが一つの世界、直線的な思考の世界とは異なり、一つ一つの事実を組み合わせてその上のレベルに一つのまとまりを如何に作り上げるのかというダイナミックな思考が求められる世界であった。その世界を一度経験すると、そこには頭全体を使う喜びがあることもわかるようになってきた。

これらの科学と哲学のインターフェースから見えてきたものの中にこれからの日本にとっても重要なことが含まれていると感じたため、積極的に語り掛けるようになった。例えば、大学や学会などから依頼された場合、迷わず自らの考えを伝えるようにしている。わたしの学生時代にはシニアの教授が行っていた医学概論を依頼されることもあり、戸惑いとともに時の流れを感じながらの講義となることもある。その他、3.11のあった2011年秋からは「科学から人間を考える」試みと称し、サイファイ・カフェSHEを東京で開いている。サイファイとは科学(Science)と哲学(Philosophy)の融合で、SHEは'Science & Human Existence'の頭文字を取ったものである。9月には第6回として「腸内細菌を哲学する」予定である(<http://science-he.blogspot.jp/>)。ま

た、昨年からは雑誌「医学のあゆみ」に『パリから見えるこの世界』と題した科学・医学・哲学・歴史に纏わるエッセイを連載している。

生命の歴史を振り返れば、最初にDNAレベルでの誤謬の種が仕込まれていなければその後の進化はなかった。われわれの人生においても試行錯誤が必要になるのだろう。トライアルの中に盲目的なものを見通したものがあるとするれば、最初のアメリカ行きは前者で、今回のフランスでの生活は後者になりそうである。そのいずれもが多くのエラーを生み、そこから豊かな果実が育っているように見える。この世界に投げ出されているわれわれは、自分の世界の全体をどこに見るのだろうか。家族、仕事場、仕事社会、地域社会、国、世界、地球、宇宙などなど。ひとはそれぞれが見ている世界の中で、あるいはそこから脱出しようとして試行錯誤し、幸せを求め、認められようと努める。その世界が宇宙にまで広がると完全な自由が訪れそうだが、それを決めるのは精神の働き以外にはないだろう。そんな思いを巡らす時、北大の創成期、クラーク精神の下、遙か彼方を見据えながら学んでいたであろう先達の姿が浮かんでくる。

北大医学部創設100周年に向けて

思い出の医学部基礎校舎・附属病院



北大医学部は5年後の2019年に創設100周年を迎えます。現在我国を取り巻く状況は、政治はもとより医療制度・医学教育制度も激変していますが、日本を代表する大学の1つとして同窓生も含めて一致団結してこれまで以上に素晴らしい研究成果を発信し、優れた人材を輩出し続けられる医学部で有り続けようではありませんか。同窓会新聞でも「100周年に向けて」というシリーズを開始して温故知新、未来に向かう記事を掲載していきたいと思ひます。

小林 博 (28期) 田中伸哉編集委員長から北大医学部同窓会新聞に「**医学部基礎棟、病院の写真**」についての感想文を求められました。私は同委員長には「私一人ではとても不可能である」ことをお伝えし、それより「多くの関係者にお書きいただくのがよろしいのではないかとご提案申し上げ、同委員長のご賛同をいただきました。

ということで、この件については田中委員長に代わって私が準備を進めさせていただくことになりました。そこで特定の人に偏ることなく、「出来るだけ幅広い年代層の方々に各々短いコメントをお願いしそれを纏めよう！」ということで、主に各期の評議員を中心にご執筆ご協力の依頼を致しました。

以下、卒業順に掲載させていただきます。ご協力有難うございました。

音羽博次 (16期 ご家族の代筆による)

私の医学部卒業は昭和16年3月、この年の秋には次の17期生も繰り上げで卒業し、国は軍医の増員を必要としたのでしよう、まさにその時は世界中、とくに日米が緊迫した状況であった。

その年、昭和16年(1941年)12月に第2次世界大戦が始まり私たち同期4人は北支事変以来、召集中の先輩たちの交代員として戦地勤務を命ぜられ、それこそ当時は兵役にも有無を言わせぬ時代でした。翌17年の正月には中国山西省に新品の軍医中尉として赴任してより、約4年間の戦地勤務が始まったのであるが、その間の時事については好悪を語らずであります(著書、回想「戦争の時代に生きて」がある)。

戦後、その後の医局については私た

ち「古い医局員」の存在感が薄くなったように思われた、また当時はまだまだ無医村の時代でもあり、教授の指示を受けて厚岸町立病院に赴任したのが私の戦後の始まりであった。遠い70年も前に卒業後の始まりがあり、時代のいろいろな出来事があり、懐かしく思い出される事が多くあります。

大村茂夫 (18期) 右側の細菌学教室の玄関前では中村豊教授がゴルフの練習をし、左側の薬理学教室の真崎健夫教授は中庭のテニスコートで女性と硬式テニスを楽しんでいました。

建物には特に思い出はありませんが、並木の左側には戦時中防空壕が掘られ銀杏の木が引き抜かれたこともありました。

橋本秀夫 (専3期) 写真の桜並木は何年生の幼木が植えられたのか分からないのであるが、植樹は大正11年秋から大正12年春季と分かっている。この写真では総べての添え木が取り外されており、樹木の成長から見ても、定着してから数年は経っていると思われる。とするとこの写真が撮られたのは、昭和の始め頃と考えられるのだが。

この写真は後世に遺すべき記録として、季節・天候・日射・閑静度などを考えて、丁寧に撮ったものに違いない。更に特筆すべきは、当時としては珍しいカラーであること。その頃の写真から考えると、モノクロに色を重ねる様式なのだろうか。

古屋 統 (専6期) 医学部附属病院の写真、○で囲んだ所は、第一講堂でしょうか。此の写真では工学部に向かう道路が整備された直後の感じがあって、私の記憶にある道路よりはだいぶ古い時期と考えられます。樹木の大きさから見てもかなり違っております。戦時中は、此処の木が伐られ、野菜畑(イモ、カボチャ)とされました。現在の銀杏並木は戦後のものですね。



医学部前庭、南講堂前も大分古い時期のものようです。此処も戦中は野菜畑とされた部分がありました。戦後(昭和22~23年頃?)医学部前の松の木で首つり(縊死自殺)があり、大騒ぎをした思い出がありますが、その木がありません。後日移植されたものだったのでしょね。

私の家が近かったので昭和6~7年以降はこの辺りでよく遊んでいました。

池端 隆 (27期) 北大医学部の南講堂を挟んだ基礎医学教室の写真をみて、懐かしさにしばし浸ることができましたが、この写真から思い出す最も印象に残っているシーンは、医学部1年目の5~6月頃のこと。次の講義までの休憩時間に、南講堂の周りの芝生の上で、初夏の陽を浴びながら薄っぺらな基盤をひろげて囲碁を楽しんでいる風景です。

少し粘っこい深緑の芝生は、初夏のような陽光を浴びて生育著しく、腰を下ろし手で擦ると柔らかい温かみが伝わってきます。

予科から学部に入った安堵感と医学という講義の新鮮さに心が浮き浮きしていた頃ですね。

さあ、講義(何故か上野教授の法医学が強く印象に残っています)が始まるぞという声で、一同がぞろぞろ階段教室に戻る様子を鮮明に思い出させてくれる写真でした。

中川昌一 (28期) 正確な年代はわからないが、多分大正時代、北大医学部の基礎医学の建物が完成し、病院の建築が進行中の時代(本館と第一外科病棟以降の建物はまだ建っていないように見える)の写真なのであろう。道路の桜の木々(現在の銀杏並木)も若々しく、この時代の医学部を象徴しているように見える。

基礎医学教室の対称的な建物の中央に建ち、広い芝生に囲まれた南講堂は医学部の象徴として、その後、長い間、画や写真の対象になった。一方、病院として最初に建てられた本館は(まだ後の時代のツタに覆われた重厚な感じになっていないが)、北大病院の象徴としてこれも多くの画や写真に

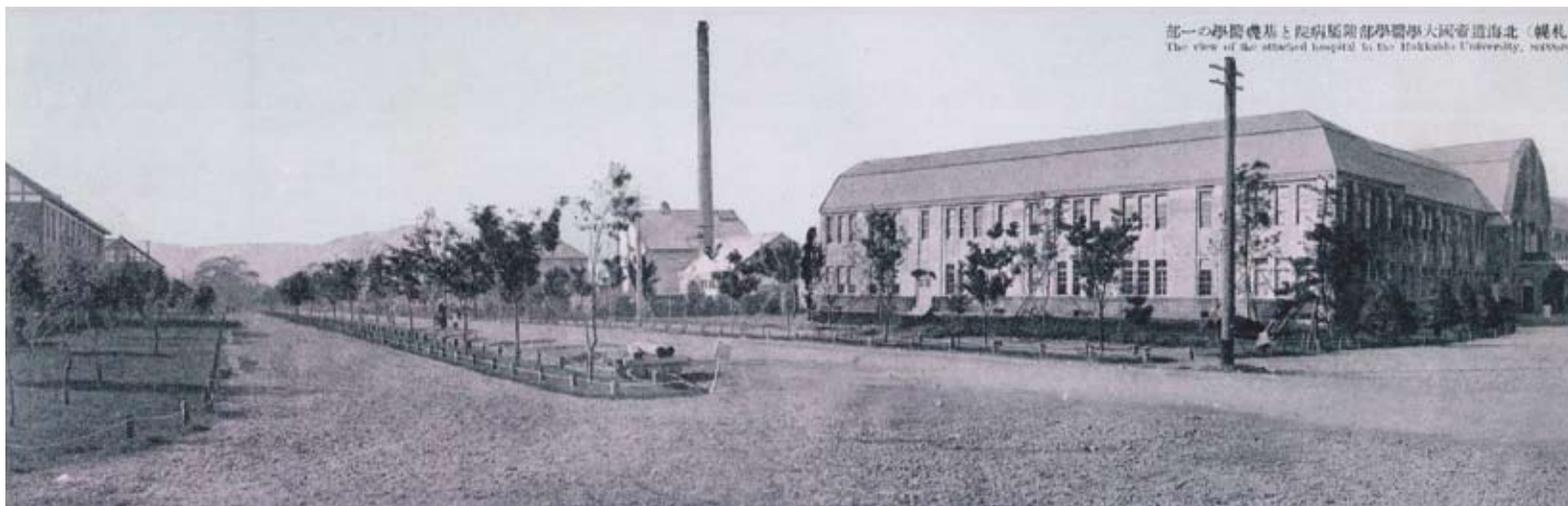
使われた。

ただ、病院の本館は戦後、第三内科・整形外科の新設に伴い、その病棟に転用されて、ベッド・サイド教育のなかった私達の時代の学生にとっては、縁がなかったが(昭和33年火災で全焼)、我々より前の戦前・戦中の学生の方々には外来棟であったので、ポリクリとその試験をこの建物で受けた思い出の多い建物のはずである。

南講堂はほぼ解剖の講義用に使用されていたが、教壇の後には横幅が非常に広い引きちがい式の黒板が備えられていた。私たちの時代には、初代の第一解剖の山崎教授、第二解剖の平光教授はすでに退官・転勤されていて、児玉教授、伊藤教授から講義を受けたが、北大医学部の第一講はこの教室で始まり、一期生は山崎教授のノートなしでの「てにをは・ドイツ語」の講義に驚かされたと伝えられ、さらに、画才に秀でておられた山崎教授はこの黒板全面を埋める見事な「黒板絵」を描かれたとのことなので、その様子を想像して畏敬の念に駆られたものである。

方波見康雄 (28期)

「追憶のイメージ」
端正な佇まいのかつての学び舎
その古びたモノクロームの写真に
追憶のイメージが彩を蘇らす
ローンにグリーンが萌え出で
樹々の枝葉が緑にそよぎ若い生気が溢れる
講堂で講義が始まる
脳の断面図が 広い黒板に
白と赤と黄と青のチョークで描かれる
ラテン語と独逸語と英語を添えて
生理学では 人工赤血球を
病理学では 黎明期の癌免疫を・・・
どの講義でも
探求への夢が語られ
多くの友は 耳を澄ませ 目を輝かせ
孤高の友は 後の席で 詩集を開き
それでも フマジメではなかった
パワーポイントも
ヴォイスレコーダーも
なかったあの時代
直ぐに芯が折れる鉛筆で学んだのに
それでも
真面目な臨床医や 研究者として
おのれの個性を伸ばした



多数の友が 幽界に移籍したいま
懐旧を 温かくつつみこむ
魂のふるさと アカデミアの
古びた写真へ オマージュを捧げる

三浦 旭 (28期) 私共28期は、昨年卒業60周年を祝った。祝宴の翌日、もう見収めになろうからと母校訪問をした。クラーク像を始めとする北大キャンパス巡りのあと、新学友会館「フラテ」に着いた。悲しいことに、其処迄の行程の何処にも、われわれが学んだ医学部の面影は何一つ残っていなかった。尋ねるべき心の原風景を失ってしまったのが、誠に淋しく心残りであった。

こんな素晴らしい写真があったのか…。(配置図参照) コの字型の基礎校舎と中庭は、あの当時の医学生達が学び始めた出発点であった。南講堂を中心に、東・西講堂夫々の佇まい。講堂に繋がる各教室の教授方の個性溢れる容貌が目に見え、昼休み三三五五芝生にたむろしていた学生時代がこよなく懐かしい。

やがて医学部も100周年を迎える。旧校舎、校庭の記憶を何とか甦らせる方法はないものだろうか。

多米 豊 (34期) 私は北大の教育学部を卒業して、医学部に入学したのですが、まず驚いたのが、教務室の前に張り出された学生への掲示板の文章でした。“〇〇殿、教務係に来られたし”と敬語が用いられていたことでした。学生に対する丁寧な扱いに感激しました。そのことによって学生の中にそれにふさわしい品格を持たなければならぬという自覚が生まれるのではないかと思ったのでした。

今 忠正 (35期) 北13条から工学部へ続く通りに植樹された細い木々は、現在見事な銀杏並木となり、ポプラ並木と共に札幌の名所となっています。秋の紅葉の頃、西に日が沈むとき黄色に輝く並木道のみごときに圧倒されます。

病院の裏側にボイラー棟の高い煙突がみられます。私が第一外科に入局した頃はこの付近に手術場があり、床は水洗されるタイル貼りだったので手術室ではゴム長靴を履いておりました。現在、私の足の水虫はこの時感染し、50年以上に渡って継代培養してきました。故三上二郎名誉教授のお下がり長靴を使用していたので水虫も三上先生から引き継いだものと考えております。

基礎医学棟その中央にあった半円型階段教室の南講堂に印象深い思い出があります。最上段の席はアルプススタンドと称し、私の属するあまり成績の良くないグループの指定席でした。その中の仲間アメリカの留学を強く希望していたK君が居り、当時米国進駐軍のラジオ (FEN) 放送で授業中英語の勉強をしていましたがその甲斐あって、米国留学を果たし、小児科・アレルギー科の専門医となり、Wisconsin州立大学の特任教授とMilwaukee市で開業医として活躍していました。最前列の中央部は成績優秀者の指定席でこのグループからはさすがに母校の教授となったものがおります。

学年対抗医学部大運動会が基礎医学棟の中庭で行われていました。我々35期は4年連続で優勝しましたが、この新記録の4連覇は仮装行列の成績の結果でアイデアマンのK君の存在が大きかったと思います。

鈴木重統 (39期) 中庭のローンを囲んで、中央の南講堂、左側の東講堂、右側の西講堂、いずれも私たちが基礎医学を学んだ思い出の講堂である。

昭和34年の4月11日、医学部39期生は未だ白い斑点が残り、肌寒い風が吹く中を医学部の正門をくぐって進学式が行われた南講堂へ向った。

当時の医学部長は病理の武田勝男教授で、式辞のなかで、「君たちは、第一に少なくとも北海道を代表する人材となれ。第二には鬼手仏心の人となれ。メヂカル・マーチャントにはなるな。」と述べられていたことを昨日のことのように思い出す。

昭和56年、旧医学部の中庭のあたりを中心として、いまの医学部保健学科の前身である医療技術短期大学が開学したが、私は同学部で昭和58年から16年間を教育と研究に従事した。

ハンス・カロッサはミュンヘン大学ではじめて医学を学んだころのことを「美しき惑いの年」として記しているが、在職中は南講堂で研鑽を積んだ日々を思い出してはわが身を鼓舞した。

その南講堂のあたりが私の研究室であったことも何かの奇縁であろう。

南 勝 (40期) 中央の南講堂の左手に見える研究棟の1階に薬理学教室の研究室があった。左端は、摘出心筋や小動物の実験室に使われ、次いで電解質測定室が並んでいた。玄関を挟んで、小使室に続く土間は、大型動物の実験に使われていた。次いで電気生理学の実験室そして右端の生化学の実験室へと続いていた。曲がって奥には教授室、医局と続く階段を昇れば名誉教授室があった。

薬学科、後に薬学部と独立するまで薬学の研究室が2階に並んで実験に励んでいた。時に水が下の薬理の教室に漏れ落ちてくるという洪水事故が起こった。その後、2階には、歯学部設置準備室も置かれた。夕方に、1階の廊下を家路に急ぐ自転車に乗った教官の姿も思い出す。

小林邦彦 (42期) 基礎医学校庭の写真は、いつ頃のものだろう。私の記憶している校庭の散策路は砂利道ではなく簡易舗装であったような気がする。昭和37年に学部生となった時、ここで医学部大運動会が行われ、マラソンの最終コースがこの散策路一周で、そこで某先輩と壮烈なデッドヒートをした

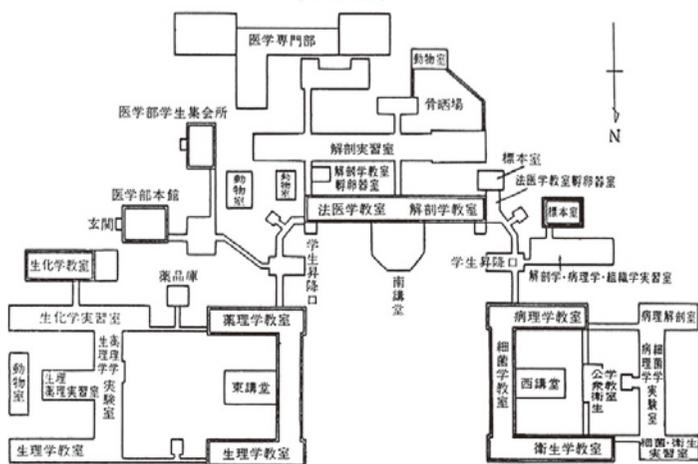
のを鮮明に覚えているからである。砂利道では、あのスピードでは走れない。この校庭の散策路は一周100mほどであったと思うが、雪が降ると当時創設されたスキー部距離班にとって格好の練習場と化した。講義が終わってすぐ飛び出せるという利点があったが、練習は細いスキーを着けてひたすら周回するという単純作業であった。

中村仁志夫 (44期) 私達44期は南、東、西の3講堂で、南では解剖学、法医学、東では生理学、生化学、西では病理学、細菌学、衛生学、公衆衛生学などの授業を受けた最後の世代(1965年頃)である。木造の階段講堂の入り口は前方にしかなく、途中退席はできなかった。休み時間には中庭でキャッチボールやバレーボールをしていた。年に一度看護学校生など附属学校学生も含めて医学部大運動会が行われたときには、仮装行列などもあって、病院職員や周辺の街の人達も見物に集まり、賑やかだった。写真ではその後東講堂(左側)入口前に植えられ、今は巨木となっている1対のプラタナスがまだ見当たらないが、この中庭には医療技術短大部、医学部保健学科を経て発展した大学院保健科学研究所の建物が存在しており、一両年中に同院の新棟が落成する運びとなっている。

【附属病院と基礎医学の一部の写真について】

遠くに霞む手稲の山並みは今は見わたすことができない。また、昨今の観光名所たる北大イチョウ並木はこの時代にはまだ植えられておらず、桜と紅葉が13条通りに彩りを添える役を担っていたと聞いている。左側の基礎医学棟には1965年時には衛生学教室などがあつた筈であるが、現在は薬学部や電子科学研究所などが位置している。右側の病院および写真中央あたりに現在位置しているのは北海道大学病院の歯科医療センターと歯学部研究棟で、北大病院の主要部はずっと右奥(北側)に建てられている。木造2階建の建物から何代かを経て12階建てのビルになった本院の状況は時代の変遷を如実に表しているが、誰がその変化を予見し得たであろう。しかし、イチョウ並木が植えられた時(1930年代末期)には、現在の見事なたたずまいを夢見た人がきつといたに違いない。先人の想いに感謝することしきりである。

医学部建物配置図 (旧校舎)



宮坂和男 (45期) 医学部中庭と基礎講堂の景観。正面突き当たりが南棟。昭和40年頃、私達はこの木造2階建ての階段教室で講義を受けた。講義の内容を思い起こせないのは、我が感性の鈍

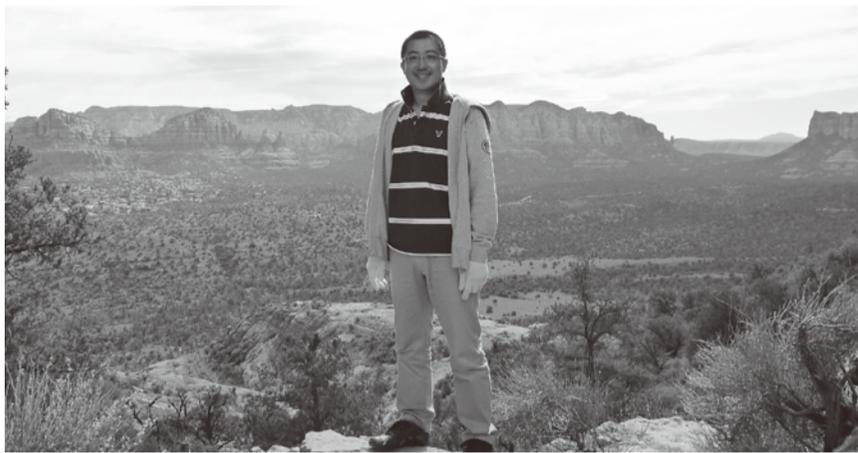
さ。2階の後側から中庭へ降りる階段があった。出席用紙が配られると、ある者は後方の階段へ。そと静かに。しかしドカドカと足音が。古びた階段は音を出すことに容赦しなかった。

中庭から銀杏並木を挟んで北側、現在の北大病院付近には老いた医学部食堂があった。鼠が床を走り回っても不思議ではない。かけうどん、かけそばが35円。厨房のカウンターにはどんぶ

りに盛られた揚げ玉。それをスプーンで掬ってのせて、35円のためぎうどんが完成。立ち食いしながら囲碁観戦。テーブル席では、高段のN先輩とT先輩の名人戦が行われていた。

「海外で活躍する同窓生」

—「志を得ざれば再び此の地を踏まず」—



“Are you from New York?” ふいに夏期実習に来ている生粋のNY育ちの医学生にこう聞かれた。3.11のすぐ後に渡米して早いものでもう2年か、人種のつぼNYで日々研究に没頭している私にとってこの質問はちょっと嬉しかった。どうみても日本人、敢えて似ていると言えばディズニーランドに遊びに来た金正日かという私にこの質問を浴びせた彼女の真意はわからないが、自分もこれでNew Yorkerの仲間入りを果たしたと解釈した。

こちらの学生は意欲的だ。夏休みになると高校生からラボに出入りし、経験をしようとする。なるほどこうすることが医学部入学への良い履歴書作り、というわけで皆必死だ。私は去年からとある女子高生の相手をしている—女子高生とは聞こえはいいがこれは大変。注意散漫、遅刻常習犯で多くを求めが決して謝らない、これぞアメリカンスタイルか。廊下で人と軽くぶつかっただけで“Sorry.”という自分を見つめ直す必要がありそうだ。一方医学生はかなり優秀で、適当な答えで言いくるめることができないレベルの質問を連発してくる生徒もいる。施設側の学生サポートも充実しており、財団からの助成もあり、早期からさまざまな分野に接する機会が用意されていることは素晴らしい。

東大の中村祐輔教授が日本政府に愛想を尽かしシカゴ大に移ったニュース(抗がん剤開発)をとってみても日本の脆弱な医療開発基盤へは危機感を禁じ得ない。日本国内からの頭脳流出が問題となっているが、私に援助しなかった学振には強い恨みと失望を感じつつ、救ってくれた上原財団に感謝の気持ちを新たにす。幸いにもこちらにきて2年で現地のリンパ腫研究財団から助成を得ることができたため継続して研究を行っており、アメリカではチャンスが多いことを痛感する。日本政府は

可能性のあるものにはもっと金を出す必要がある、などと負け惜しみを吠えながら血液内科疾患、延いては癌の撲滅につながる成果を出すべく今日もマウスと戯れる。

MSKCCはマンハッタンにある癌に特化した基礎・臨床施設であり、目の前には野口英世が在籍したロックフェラー大学、およびコーネル大学がありこれらは密接に連携している。今日もマウスの脾臓をもらいにコーネルに出かけた。情報・モノの交換が簡単に行えるのは強みである。各研究室間の敷居も低く、コラボレーションにより説得力のある精度の高い実験をする機会に恵まれている。そんな中、同僚よりメールが。なんと私の研究内容とほとんど変わらない内容がPublishされたから見てみるというものだ。じえじえじえ！同じ研究をしている人間は3人いると思え、とはよく言われるがまさか、ここでしか手に入らない脾臓を使っている奴がほかにもいたのか！その論文を出したPI(主任研究者)は去年のアメリカ血液学会での私の発表にあれやこれやと質問してきた人だった。ずいぶんと興味をもってもらえて嬉しいなあなどと思っていた自分を後悔してももう遅い。これによって研究の新規性は損なわれ、GMT5同様奈落に落ち込みラボのアイスクリームパーティも欠席してしまった。

その頃からだ。不整脈が頻繁に走り始めた。自己診断は期外収縮、最近はランニングもしているし健康に気をつけているので器質的疾患は無いと信じていたが、数年前には100kg超の松村邦洋レベルだったので、万一ということも考えアメリカの病院を初体験受診することにした。Family Doctorというものを受診すべきではあるのだろうが、よく分からないのをいいことにいきなり循環器に行ってみた。紹介も何もなく訪れた私を女医さんは笑顔で受け入れる。きれいなオフィスにたくさんの助手

さん。分業がしっかりしてQOLが完全に保証されているのだろう、アメリカで医師として働くのはとても条件が良さそうだ。電子化システムがしっかりしていて、検査結果などすべて参照が可能、さらに担当医とのメールでのやりとりも可能である。検査結果だけを聞きに行くことはしなくてよい。これは医師にとっても業務削減できる良いシステムだ。健診を2年以上していないので採血を含め、心電図、心エコーを受けた。もちろんこちらでは痩せに分類される。これで無罪放免、要は蚤の心臓、ストレスによるものだった。

…そう、話は戻るが新規性などの問題ではない、90%以上の基礎研究は臨床応用できていない、自分のすべきことをしっかりと見定め、没頭するだけだ。野口英世はJEMに190本以上の論文を出している。英世が言うとおりの「自分のやりたいことを一所懸命にやり、それで人を助けることができれば幸せだ。」センチメンタルな気分で、『遠き落日』を観返してみる。週末にはヤンキースタジアムに出かけ、イチロー、黒田の活躍をみて、さらにはNYヤンキースでの松井秀喜の引退セレモニーに出かけて日本人としてのアイデンティティ、誇りを新たにす。

無駄を排除すること、主張すること、自分の意見を発信すること。これがアメリカ生活の掟だ。アメリカ人は働かないというのは嘘だ。朝は明るくなる前から働いている人がたくさんいる。しなくていいことはしないだけなのだ。荷物の配達に翌日配達など存在しない…過ぎたるは尚及ばざるが如し。レジ打ちの途中にもものを食べる。接客などない。しかし、「これは必要」ということには全力で一瞬で成し遂げる力を持っている。ある意味、普段は力を抜いているのだろうか。しかしこれに慣れていく自分に気づく。こうした普段の経験でまた、日本人としてのアイデンティティを自覚する。「何もしなくても良い、外に出て日本を見るだけでも良い糧になる」とは学生の時に留学を相談した恩師に言われた言葉だがその通りだ。例えば日本のような機能的な文房具はこちらには存在しない。同僚に自慢すると、いいね～とは言いが欲しくないようだ。すぐ壊れる不安定な出力のペンやマーカーを彼らは使う。不満はないのだ。必要最低限、それでも世界一・世界初を量産する国。私も無駄を省くために頭を坊主にした。別に何かを反省しているわけではない。また、こち

Memorial Sloan-Kettering Cancer Center,
Department of Immunology (van den Brink lab),
New York

庄野 雄介(79期)

らでは主張しないと不満が無いと解釈される。沈黙は金、雄弁は銀というのはありえない。モノの値段はこちらでは年々上がる。家賃もケーブルテレビも新規契約で安い期間を過ぎるとどんどん高くなる。朝のNHK連続テレビ小説が見られなくなると困るので、ケーブルテレビの契約は継続したいところだが、あまりに高くなるので電話して解約することにした。契約部門に繋がれて、強い調子で高いから辞めますと伝えると、特別に割引するとオファーが来る(作戦なのだろうが…言わなければ始まらない)。頼んだ通販の荷物が届かない、すぐに電話。改めて商品を送らせる。次の日の夜にたまたま既に届いていた荷物を見つけたのは少し衝撃で結果的にアメリカお得意のBuy 1 Get 1 Free!になってしまったわけだが、思ったことは伝える、コミュニケーションをとることが大切であると痛感する。

翻って、こちらでは無意味な飲み会や接待といったノミネーションは無い(無駄とわかっているからだろう)。一見どうでもいいようなことを延々と話している人々をラボでも見かけますが、これぞ自己の確立、アメリカ人の底力の一端なのだろう。富士山世界遺産登録、東京オリンピック開催と明るいニュースも多い日本、世界が賞賛する日本人独特の美德は保ちつつ、世界に情報を発信していかなければならない。何をにおいても重要になるのは英語だ。ネイティブに近づくことこそ真の目標であると考えていた私は大きな間違いであると気づいた。

人種のるつぼに住んでいると世界各国の人間がアクセントの強い英語で自己を主張する。英語は単なる情報伝達の手段に過ぎず、通じれば良い。完全で無ければしゃべるのが恥ずかしいという思いは世界の他の国には無いということ、イタリア人、ブラジル人の英語を聞けば分かるだろう。近隣諸国との緊張を伴う関係が、世界における日本の立場を貶めさせないように求められるのは英語での発信だ。未だに日本語記載しか無いホームページは恥じるべきだ。余談だが、勘違いしてはならない、英語を褒められても喜んではいけいのだ。褒められるのはまだまだ。冒頭に示したような質問をされることこそ、最高の喜びである。そのためには多少の間違いには目を瞑ろう。そこのUSBを抜いてくれ、というときに、ejectionとejaculationを混同して口走ったときには自分でも焦ったが…。

血液内科医は偏屈な変人の集まりであると言われ、研究者もまた変人が多いわけで、これら変質的な生き様は世俗との関わりをしないほど仕事に没頭している美しい姿なのかもしれない(血液内科なんてマニアックな3Kな仕事も

変人しかできない)。しかしのしかかるストレスの発散の仕方は常に考えておく必要がある。セントラルパークをランニングして週末のNY Road Runnerの大会に出て自己陶醉に浸る。Run for Lifeというスローガンが掲げられている大

会があったが、まさにデブから痩せまで多くが参加するその姿は、素晴らしい大義の象徴である。ランのあとの甘いデザートは格別だ。Red Velvetという赤いケーキを食べたのだが、翌日、血便と勘違いして肝を冷やした。ほんとうに

恐ろしい国だ。 今日もまたEditor Kickの悲報が届く…。最初の研究成果を発表するには苦難の道のりになりそうだ。しかし諦めない、Physician Scientistとして臨床に還元できる研究を完遂するまでは。

告知板

<教授就任挨拶>

北海道医療大学
個体差医療科学センター 眼科学系
教授 北市 伸義 (69期)

平成25年7月1日付けで北海道医療大学教授、8月1日付けで北海道大学客員教授を拝命致しました。北海道医療大学にはこれまで眼科の教授職はなく、初代となります。新川詔夫学長(43期)はじめ諸先生のお力添えを賜りながら、診療、教育、研究に努めたいと思っております。引き続き北大でも同窓の諸先生にお世話になろうかと存じます。今後ともご指導・ご鞭撻を賜りますよう、何とぞよろしくお願ひ申し上げます。

<ご寄附>

医学部35期会 代表幹事 今 忠正様よりフロンティア基金へ100万円のご寄附をいただきました。



<学内・院内人事異動>

- <辞職>**
平成25年8月31日
堀田記世彦(76期) 血液浄化部 病院長付助教 (マサチューセッツ総合病院)
- 平成25年9月30日
飛騨 一利(57期) 脳神経外科学分野 准教授 (札幌麻生脳神経外科病院 病院長)
- 金内 優典(65期) 総合女性医療システム学講座 特任准教授 (長崎大学病院 産婦人科准教授)
- 田中 栄一(66期) 消化器外科II 助教 (北海道消化器科病院 外科医長)
- 菅野 正寛(79期) 先進急性期医療センター 助教
- <採用>**
平成25年 7月1日
小山 貴弘(78期) 産科 助教
- 平成25年 9月1日
横田 卓(74期) 循環病態内科学分野 助教
宮島 直人(75期) 血液浄化部 助教
- 平成25年10月1日
村尾 尚規(73期) 形成外科 助教
- <昇任>**
平成25年 7月1日
高木 大(70期) 耳鼻咽喉科 講師 (同科病院長付助教)
- 平成25年 9月1日
清水 勇一(64期) 消化器内科学分野 准教授 (病院消化器内科講師)
- 平成25年10月1日
数又 研(67期) 脳神経外科 講師 (同科助教)
- 中山 若樹(68期) 脳神経外科学分野 講師 (病院 脳神経外科助教)
- <転出>**
平成25年 9月1日
林 利彦(72期) 形成外科 病院長付助教 (北大大学院歯学研究所准教授)
- <休職(出向)>**
平成25年10月1日
曹 圭龍(80期) 内科II 特任助教 (釧路赤十字病院)

<同期会案内>

★北大医学部51期同期会@東京のご案内
今秋、5年ぶりに次の要領で東京での51期同期会を催します。久闊を叙する機会に致したいと存じますので、是非ご参加下さいますようご案内申し上げます。

日時:平成25年11月9日(土) 18時~
場所:学士会館 3階301号室 (着席での会食)

(住所) 東京都千代田区神田錦町3-28
(電話) 03-3292-5936
会費:15,000円(当日)目処

出欠を、松谷あてメール(matsutani-yukio@niph.go.jp)若しくはFAX (048-469-1736) 又は下記の電話若しくは郵便にてお知らせ下さい。なお、都合によりご欠席の方は、併せてメッセージを頂ければ幸いです(当日紹介予定)。

(世話人)
佐藤 裕子
日本赤十字看護大学 教授

松谷 有希雄
国立保健医療科学院 院長
(勤務先)

住所:〒351-0197 埼玉県和光市南2-3-6
電話:048-458-6123
FAX:048-469-1736
E-mail: matsutani-yukio@niph.go.jp

★北大医学部80期卒業10周年同期会

この度、卒業後初めての同期会を10周年より少し早めですが、以下のように開催します。

いろいろとお忙しいと思いますが、ぜひご参加ください。

なお、詳しいことは80期のメーリングリストまたはfacebookでもお知らせしています。

日時:平成25年11月9日(土) 18時開宴 (17時45分より記念撮影)

場所:メルキュールホテル札幌 (札幌市中央区南4条西2丁目)

会費:12,000円
着席での会食を予定しています。出欠の連絡は松島 (mmasaki@huhp.hokudai.ac.jp) までお願いします。欠席の方は当日紹介しますので併せてメッセージもいただければ幸いです。なお、メーリングリストに関する問合せは木佐 (kkisa@med.hokudai.ac.jp) までお願いします。(幹事:松島)

医学部同窓会への寄付について

医学部同窓会では皆様からの寄付金を受け入れています。

いただいた寄付金は特別会計で積み立てており、一定の金額に達しましたら同窓会理事会及び評議員会で慎重に検討し、例えば学生への奨学支援、教員への研究助成、あるいは平成31年に迎える医学部創設100年への援助など、同窓会事業、医学部事業に有意義に活用させていただく所存でありますので、皆様のご支援・ご協力をよろしくお願ひ申し上げます。

なお、寄付をいただいた場合は、寄付者のご了解の下、同窓会新聞でご紹介させていただきます。

同窓会への寄付につきましては、同窓会事務局にお問い合わせください。

北海道大学医学部同窓会会長 浅香 正博

フラテ100号発行のお知らせ

医学部フラテ編集部

同窓会新聞をご覧の皆様、いつも学友会誌フラテをご購読いただき、誠にありがとうございます。皆様の暖かいご支援により、今春発行の99号も大変ご好評をいただきました。

さて我々フラテ編集部では今年度もフラテ発行に向けて準備を進めております。お陰様でフラテは100号を迎えることができました。従来の内容に加えて、100号記念特集としてフラテの歴史、顧問インタビュー、地域医療特集なども企画しております。どうぞご期待ください。

100号の発行は、来年3月上旬を予定しております。購読をご希望の方は、同封の振込用紙にてお支払いをお願い致します。注文および支払方法を、郵便振込みによる前払いとさせて

いただいておりますことにご理解をお願い致します。

なお、フラテの申し込みは9月と1月の2回受け付けております。二重申し込みなされないよう、ご注意ください。9月にお申込みされる方は、1月にお申込みされる必要はございません。

また、当編集部には99号以前の残部もごございます。ご希望の方は、100号をお申し込みの際に、振込用紙にその旨をお書き添え下さい。別途、送らせていただきます。99号を申し込まれた方で、まだお手元に届いていない方もどうぞフラテ編集部までご一報ください。

<100号の主な内容>

- ・フラテ100号記念特集
- ・特集記事
- ・フラテ各地に行く<沖縄編>

- ・教室便り
- ・学年紹介
- ・部活紹介
- ・新任教授のご紹介
- ・各講座新旧名称一覧
- ・茶苑
- ・学生の広場 など

<読者メッセージのお願い>

この度、読者の皆様よりフラテへの「読者からのメッセージ」を募集する運びとなりました。

御寄稿いただけます際は、フラテ編集部まで原稿をお送りいただければ幸いです。詳細に関しましては、下記を御覧ください。

また編集作業の都合上、原稿は11月8日(金)までにお送りいただきますようお願い申し上げます。御寄稿をお待ちしております。

◇募集要項

内容・字数:400字以内。フラテに関する

ことでしたら内容に制限はございません。

形式:手書き、データ(TEXT形式、Word形式可、Windows、Mac可)のいずれでも対応致します。なお、いただいた原稿・写真の返却は本に記事が掲載されてからになりますのでご了承ください。

宛先:下記をご参照ください。

備考:ご寄稿いただいた後、2週間ほどで原稿を送付致します。訂正・加筆などの校正はそれの際にお願い申し上げます。

<お問い合わせ先>

フラテ編集部
〒060-8638 札幌市北区北15条西7丁目北海道大学医学部内
TEL/FAX 011-736-1444(留守電あります)
E-mail:frate.med@gmail.com

平成25年度 フラテ研究奨励賞受賞候補者の募集!!

平成25年度北海道大学医学部同窓会フラテ研究奨励賞受賞候補者を次のとおり募集します。

なお、昨年度は8名の会員から応募があり、選考委員会で慎重かつ厳正な審査を行った結果、4名の方々を受賞者として選考しました。

受賞者には毎年2月に開催される同窓会総会で授賞式を行い、表彰盾及び研究奨励金が贈呈されます(同窓会新聞第145号第2面を参照)。

今年度は第11回目の募集となりますので、多くの応募があることを願っております。

1. 応募資格

平成25年度末(平成26年3月31日)現在、40歳未満である本会会員

2. 募集期間

平成25年12月1日から12月31日までの1ヵ月間(郵送の場合は、12月31日までの消印のあるものは有効とします。)

3. 申請書の提出方法等

(1)申請書及び関係書類を封筒に入れて同窓会事務局に持参するか、郵送すること。

同窓会事務局は医学部管理棟2階です。郵送先住所 〒060-8638

札幌市北区北15条西7丁目

北海道大学医学部内

北海道大学医学部同窓会事務局

(2)指導教授または関連施設長等の推薦書を申請書に添付すること。

(3)提出部数は各6部(コピー可)とします。応募書類は返却しません。選考終了

後に責任を持って焼却処理しますのでご了承ください。

(4)提出方法 封筒に「フラテ研究奨励賞応募書類在中」と朱書し、郵送する場合は必ず「簡易書留」としてください。

(5)申請書様式は、同窓会ホームページ: <http://www.med.hokudai.ac.jp/~alum-w/> からダウンロードして使用ください。

4. 授賞件数、賞の内容等

(1)授賞件数 5名以内

(2)賞の内容 表彰盾及び研究奨励金20万円を授与

(3)研究奨励金の使途 特に限定しておりません。

5. 選考結果の発表

(1)受賞者が決定次第、北大医学部掲示板及び同窓会ホームページで発表し

ます。

(2)応募者には、書面により選考結果をお知らせします。

(3)同窓会新聞で受賞者氏名、受賞対象の研究課題及び選考経緯等をお知らせします。

6. 授賞式

同窓会総会(平成26年2月10日(月)開催予定)において、授賞式を行います。

7. その他

(1)受賞者には、授賞式への出席及び同窓会新聞への寄稿をお願いしています。

(2)ご不明の点については、同窓会事務局までお問い合わせください。

Tel・Fax 011-706-5007

E-mail furate@med.hokudai.ac.jp

新刊書紹介



【写真集「光彩の日々」 Part 2 旅へ】
黒岩 英(33期)
(株)マインド

著者は、母親同志が姉妹の従兄弟の谷口博名誉教授の義弟に当たる方で、医学部では13期先輩と伺っております。卒業後は大学院DCを修了され、札幌と旭川での勤務の後に九州大分に移られたので、直接にお会いすることなく過ぎておりましたが、この度「光彩の日々」を従兄弟から見せて頂きました。専門書ではありませんが、勤務医としての忙しい合間を縫って訪れ、遠くはスイスから国内の各地を訪ねての自然を写した四季折々の記録は、忙しい勤務の疲れを癒す書であると云えます。

著者が、生まれ育った北海道より九州に移ったからでしょうか、冬景色への憧れはスイスの山岳、カナダの大氷原、アラスカのツンドラの写真などに残されているようです。一方、国内では世界遺産に登録された富士山や、北海道から沖縄まで印象に残る写真が数多くありまして、見る人に我が国の美しい自然の存在を教えているかもしれません。また、夫婦揃って趣味の成果のためでしょうか、四季を彩る花や紅葉の写真も見受けられ、最後のカナダのイエローナイフでのオーロラの写真は、心に残る神秘的な場面ですので、誰でも行ってみたいと誘われる美しさを実感できましよう。

この写真集は自費出版のPart 2ですが、平成16年6月に発行のPart 1続編としての発行と聞いておりますので、著者による心尽くしの記録の数々を、楽しんで頂きたいと思えます。

(46期 水野和子)

※購入をご希望の方は、まず同窓会事務局にご連絡ください。

TEL&FAX(011)706-5007

E-mail:furate@med.hokudai.ac.jp



【子どもの頭痛】
藤田光江(46期)
メディカルトリビューン
¥1,680

著者の藤田光江氏は、北大小児科出身の女医さんですが、1980年に筑波学園病院小児科に勤務以来、それまで疾病として殆ど重要視されていなかった小児の頭痛に関心を持ち、長年の臨床経験を纏めた「小児の慢性反復性頭痛の研究」で医学博士(北海道大学)を受理された、日本でも数少ない小児の頭痛の専門家です。氏はこれまで「小児の頭痛」に関する著書を幾つも上梓していますが、今回の「子どもの頭痛 頭が痛いって本当だよ」は、それらを集大成しながら平易な文章と可愛い挿絵で誰もが容易に理解できるように工夫された名著です。大人と違って子どもは表現が未熟なため頭痛を訴えてもなかなか理解されない現況を少しでも打破してあげたいという著者の子どもへの優

しい気持ちで、この本を上梓した最大のモチベーションだったことが窺えます。工夫といえば、小さな子どもの頭痛を的確に評価するため、顔の表情で頭痛の程度を判断し数値化する視覚ペインスケールを導入し、その数値を著者が考案したグラフ式頭痛ダイアリーに毎日一定時間毎に記入しその変化をグラフ化することで頭痛そのものを可視化したことが挙げられます。これを見ることで本人はもとより、家族も担当医も頭痛の程度や種類を客観的に把握できるため、以後の対策が執りやすくなるのが容易に推測できます。この著書は、主に一般読者を対象にしていますが、我々臨床医にとっても大変有意義な情報が得られる一冊です。

(42期 小林邦彦)

一面の写真説明

「モデルバーン」

吉田 美穂(83期)

国の重要文化財、北海道遺産にも指定されている「札幌農学校第2農場」を訪れたことはありますか?学生達の賑やかな声があふれる北大メインストリートを北端まで歩くと、深い緑に囲まれ、

鮮やかな芝生と落ち着いた木造建築のコントラストが美しい第2農場が私達を出迎えてくれます。この農場の構想を立てたクラーク博士が北海道畜産業の模範となることを願って、家畜房を「モデルバーン(模範家畜房)」と記載し、いつしかこの区画全体がモデルバーンと呼ばれるようになりました。第2農場開場当時の建築物が現在も9棟保存されています。

編集後記

北大構内の北13条通り両側、東西約380メートルにわたる70本のイチョウ並木。四季折々に見せるその美しい姿は、今ではすっかり北大キャンパスの顔として大学関係者のみならず多くの市民や観光客を惹きつけています。ところが、今回の編集作業の中で明らかにされたこ

ととして、当初は同じ場所に桜と楓の幼木が植樹されていたそうで、これらは残念ながら根づかず、イチョウに植え替えられたという経緯があったようです。後世のため試行錯誤された先人たちは、現在の堂々たるイチョウ並木にきつとご満足いただけることでしょう。

(70期 神島 保)

同窓会新聞は142号からHP上でご覧いただけます。アドレスは次の通りです。

<http://www.med.hokudai.ac.jp/~alum-w/news/index.htm>

ご意見等ございましたら、事務局までご連絡くださいますよう、お願いいたします。

■お詫びと訂正

同窓会新聞145号、2P「総会並びに新入会員歓迎会」中央の写真キャプションは、「乾杯の挨拶をする名誉教授三浦旭先生(28期)」とありますが、正しくは「乾杯の挨拶をする三浦旭先生(28期)」です。お詫びして訂正いたします。